
性別人間と幽靈人間

凧金

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

性別人間と幽霊人間

【NZコード】

N9628Z

【作者名】

嵐金

【あらすじ】

高校2年生へ進級を果たした安藤未来。

春になり、部活動の勧誘がスタートする中、未来は、勧誘先で従兄弟に再会する

プロローグ

吸血鬼、吸血天使、天界少年、魔界少年、人間天使……ここ数ヶ月で、色々な者に遭遇して、そのたびに何かを得て、何かを学んできた。

暁文のおかげで、自分に自信を持つことが出来た。

グレイのおかげで、自分の良さに気付く事が出来た。
瀬夏のおかげで、子供嫌いが治り、今は小さい子が可愛いと思えるようになった。

カラスのおかげで、素敵な彼氏を見つけることが出来た。

紅丞さんのおかげで、心から人を好きになることが出来た。

これからも、何かに遭遇して、そのたびに何かを得て、何かを学ぶだろう。……そんな気がする。

……って、いきなりエピローグのような感じになってしまったが、
これはあくまでプロローグ。

今回は、幽霊体質になつた人間と、久しぶりに再会した従兄弟の話。

4月。私は高2に進級し、紅丞さんは人間に戻り、無事に学校への復帰を果たした、月の後半。

「未来くーん！！大ニユース大ニユース！！」

朝。綾子が、人がまばらに集まつた教室で、大声で、しかもあるう事か”くん”付けで話しかけてきた。

「綾子……あんたねえ、いい加減にしないと私もそろそろ怒

「あーあー！説教なら後で聞くから！！それよりも大ニユースだよ

！！」

「まつたく……何？」

「1年生に、スッゴくカツコいい眼鏡の男子がいるんだって！！もしかしたら、佐川先輩以上かもよ！？」

カツコいい男子がいるなんて、正直な所、興味ゼロなのだが、”佐川先輩以上かも”と言う言葉に、少し力チンと来た。

「……紅丞先輩以上？」

「そう！！噂によると、近寄った女子はみんなその男子に惚れちゃうほどカツコいいらしいの！！……もしかしたら、未来も惚れちゃうかもよ！？」

綾子は何故か、ほかの誰よりも早く、私と紅丞さんが付き合つてることと、同棲していることを探り当てた。私も紅丞さんも隠してたのに……もしかしたら、探偵にでもなれるのかもしねない。

「……あのねえ、私は顔で紅丞先輩を選んだわけじゃないの。たとえ、その男子が紅丞先輩よりもかつこよくても、惚れるわけないでしょ。」

私は、紅丞さんの事は、家では”紅丞さん”だが、学校では”紅丞先輩”と呼んでいる。

「ヒューッ！ラブですねえ安藤未来さん！」

「はいはー……。」

「……でさつ、私ね、今日はその男子に、会いに行こうと思つんだ。
だからさ、未来も一緒に行かない？」

「わ、私も？……なんで？」

「本当に惚れちゃ わないかどうか、確かめたいのさー……ついでに、
演劇部の勧誘とかしちゃ えば？」

確かに、去年から、演劇部には女子の入部希望者が耐えない。

紅丞さんがいるのが原因なのは目に見えているが。

「でも、確かにこれじゃあ、演劇部がキヤバクラになりかねないか
らな……うん、私も行くよ。」

「ありがとー未来ー。」

「で、その男子、なんて名前なの？」

「確かねえ……津谷陸つたにって言つんだって。」

「津谷、陸……あれ？……どこかで聞いたことあるよつな……？」

「ん？もしかして、知り合なじい？」

「いや、多分氣のせいだと思う……多分。」

「そつか。じゃあ放課後に津谷君の所に行つてみよーーー！」

綾子は意気揚々と自分の席に戻つていた。

部活

私は今、演劇部の活動拠点 講堂にいる。

今の時期、演劇部は、活動してはいなく、色々な生徒に勧誘をしてまわっている……いわば、勧誘期間真っ盛りなのだ。で、今日は勧誘方法の作戦会議の真っ最中。

関係者以外立ち入り禁止なので、綾子には講堂の外で待つてもらっている。

会議終了。

ある生徒はそのまま帰り、ある生徒は勧誘に行つた。

私は、ちょうど津谷陸の話を出したところ、そいつを勧誘しにいって言わされたので、綾子と一緒に行くことにした。

「ついた、ここだよ。」

1年3組の教室前に到着。

「でもさ、綾子。もう放課後だし、さすがに帰っちゃったかな？」
意外と会議が長引いたし、有り得るかも。

「いやいや、聞いた話によると、津谷君は、辺りが暗くなるまで帰らないらしいよ。もしかしたらまだいるかも。」

綾子はそう言いながら、教室の扉をノックした。
ガラツと、扉が開く。

「はーい?……あれ?」

そこにいたのは 見たことのある人物だった。

再会

噂の男子、津谷陸。

その姿は、眼鏡をかけてはいるが、確かに顔立ちがよく、見た女子全員が惚れてしまうのも頷ける。

そして、彼の顔には、見覚えがあった。

「えつと……誰？」

彼は綾子の顔を見ながら質問した。

「私達、演劇部の勧誘で来たんだけど……。」

演劇部でも無い綾子が話し始めた。

「演劇部？」

「あつ、私は演劇部じゃなくて、こっちが演劇部なの。」

と、言いながら、綾子は私の方を見た。

「えつと、そっちの人は……もしかして、安藤未来？」

名前を言い当てられた。

やつぱり、私はこの人に会つたことがある。

「……もしかして、陸？」

「やつぱり、未来だよな！？」

陸の顔が一気に明るくなつた。

「未来だあー！久しぶりー！」

そして、あらう事か、私に飛びついてきた。

「うわっ！？ちょっと、陸！離れなさい！！」

「え？あ、ごめんっ。」

陸は私から離れた。

その光景に、綾子は目を丸くしていた。

「え？え？……未来、津谷君と知り合いなの？」

「えつと……私の、従兄弟なの。」

「い、従兄弟お！？初耳なんだけど！？」

「私も、会つまで忘れてたのよ。」

それを聞き、陸が食いついた。

「未来、忘れるなんてひどいよ。」

「「」めん……。」

なんか、綾子と陸つて、キャラがかぶつてる気がする……。

「……で? 今日はどうしたんだつけ?」

陸がワクワクしながら聞いてきた。従兄弟相手に勧誘つて、なんとなく罪悪感が……。

「えつ……と、陸、何部に入るか決めた?」

「んー……まだ。」

「演劇部とか、どう?」

「演劇部ねー……まだ迷つてる。でも、未来が入つてほしいって言うなら、入るけど?」

「じゃあ、頼めるかな?」

「おう。……顧問に入部届け、出せばいいんだつけ?」

「うん、それじゃ、またね。」

「はーいっ。」

私たちは、講堂に戻ることにした。

講堂に戻ると、紅丞さんが勧誘に行かせた生徒を待っていた。

「紅丞先輩！」

紅丞さんに駆け寄る。

「あ、やっぱり未来だつたか。」

「”やつぱり”って、どういう事ですか？」

「未来の足音が聞こえたんだよ。」

「あ、そう言うことですか……。」

紅丞さんは、4月の始めから、月の中頃にかけて、ある事件が原因で、人間ではなく天使になつてしまつていた。だが、カラスのアイディアのおかげで、無事、人間に戻ることが出来た。でも、完璧な人間ではなく、私のように、人間ではない力を持つ事になつてしまつたのだ。

その力と言つのが、「五感がランダムにパワーアップする」というもの。

簡単に説明すると、特に何もしていらないのに、聴覚・嗅覚・味覚・触覚・視覚のうちどれかが、ランダムに選ばれ、飛躍的にパワーアップしてしまうということ。

……パワーアップの限度は決まつているようなのですが、どのタイミングで、何をパワーアップさせるのか、は選べないようで、本人はいまだに慣れることができずに困つていてるらしい。

この前なんか、睡眠中に聴覚がパワーアップしてしまつて、自分の心臓の音が邪魔で一睡も出来なかつた、と語つていた。

「……てことは、今、聴覚がパワーアップしてる、つて事ですか？」

私は綾子から離れ、綾子には聞こえないくらいの小声で質問した

小声でも、今の紅丞さんには普通の音量に聞こえるだろう。

「ああ。……ついでに言つと、嗅覚もパワーアップしてゐる。」

「それは、大変ですね。」

「大丈夫だよ。」

小声で会話する私たちの後ろで、綾子がニヤニヤしながら私たちを見ていた。

「……ちょっとすみません。」

紅丞さんに断りを入れ、綾子の元へ向かう。

「ちょっと、綾子。何ニヤニヤしてんのよ。」

「いやあー、小声で何話してんのかなーなんて思つて……。」

「別に、何でもいいでしょ？……『気にしないでよ。』

「カツプルの会話ほど気になるものはないよ?」

「はあ……つたく……。」

「で?先輩に津谷君の事、言つた?」

「あ、言つてなかつた。」

「…未来い、最近凡ミス多いよ?幸せ疲れですかあ?」

「嫌みつたらしく言わなくていいから。」

とりあえず先輩の所に戻る。

「……紅丞さん、聞いてました?」

また小声で話しかける。

「ああ。……新入部員か?」

「はい、それも、私の従兄弟なんです。会うのは…だいたい、5年ぶりくらい何ですけどね。」

「へえ……従兄弟……。」

「何故ジト目……。」

「私、別に浮気しませんから。」

「まあ、それなら良いけど……。」

すると

「あつ……。」

「どうしました?」

「嗅覚が元に戻つた……。あ、でも視覚がパワーアップした……。」

「……なかなか休まりませんね。
「ああ…本当、困つてゐるよ……。」

「その時、

「未来ー、何してんのー。」

しごれを切らした綾子が私を呼んだ。

「……なんか、すみません。やっぱり綾子は帰らせるべきでしたね
……。」

「いや、別に大丈夫だけど……。」

私は再び綾子の元へ行つた。

「……未来くん、愛し合つのは構わないが、私の存在を忘れないで
くれよ?」

「わかつてゐよ……。」

「……じゃ、私、用事思い出したんで、帰るよ。後は2人でお幸せ
にー。そんじやつ。」

綾子はカバンを持って帰つてしまつた。

「なんなのよ、まつたく……。」

「未来。」

後ろから紅丞さんが私を呼んだ。

「何でしよう?」

「俺たちも、もう帰るか。」

「でも、ほかの部員を待たなくていいんですか?」

「いや、ほかの奴らは、さつき帰つた。」

「え、じゃあ私が最後の1人つて事ですか?」

「そう言つことだ。……じゃ、帰るか。」

紅丞さんは、近くにおいてあるカバンを持って歩き出した。
も後に続いた。

私

手紙

「紅丞さん、ちょっと、教室に行きたいんですけど、良いですか？」

「忘れ物か？」

「はい。……ノート忘れちゃって。」

「わかった、一緒に行くか。」

「はい、ありがとうございます。」

俺と未来は、2年4組の教室に向かつた。

「ちょっと待つてくださいね。」

未来は俺を入り口に残し、教室に入った。

窓側の、一番後ろ。恐らくそこが、未来の席だらう。

「……あれ？」

机の中を探していた未来が、そう呟いたのが聞こえた。

「未来？どうかしたのか？」

「なんか、手紙が入ってるんです……。」

手紙？まさか……ラブレター？

俺はとりあえず教室に入つた。

「あ、勝手に入っちゃダメですよ。」

「いいだろ……で、手紙ってなんだ？」

「これです。」

未来が机から出したのは、茶封筒に入った手紙だった。……「丁寧に、封に糊付けされている。

「誰からだ？」

「差出人が書かれてないんですけど……開けて見ますか？」

「未来が見たいと思うなら、開けてもいいんじゃないかな？」

「では、失礼して……。」

未来は指で器用に封筒を開け、中から手紙を取り出した。

「な、何？これ……。」

未来の顔が真っ青になつた。俺も手紙を覗いてみた。手紙には、まるで血のような真っ赤な字で、”お前に絶望を味あわせてやる。”とだけ書いてあった。

「不気味だな……。」

「一体誰が……。」

未来は脅えるように、封筒に手紙をしまつた。

「未来、そんな物、捨てた方がいい。どうせ誰かのイタズラだろ。」

「そう……ですかね。」

「ああ。……何かあつても、俺が守つてやる。」

「紅丞さん……ありがとうございます。」

未来は、手紙を封筒」と、くしゃくしゃに丸めてゴミ箱に捨てた。

「……それでは、帰りましょうか。」

「ああ。」

俺たちは玄関へ歩き出した。

……誰かのイタズラにしては、やり過ぎだと思つ。だって、あの手紙の字……未来には言えなかつたが、俺は今、視覚がパワーアップしてこるので解る。

あの字は、どう見ても 人間の血で書かれていた。

……妙な胸騒ぎがする。

帰る前に……

「紅丞さん、聴覚、今どうなっています?」

「玄関で、未来が俺に質問する。

「まだパワーアップしたままだ……。」

「そうですか……それでは、聴覚が戻るまで、少し待ちますか? 今外にでると、車が凄いみたいですし……。」

確かに、玄関からでも、外の車の走行音が耳に入る。

「そうだな……少し待つか。」

とりあえず、廊下にあるベンチに、一人で腰を下ろした。

……しばしの沈黙。遠くにある体育館からは、バスケットボールが弾む音が聞こえる。多分、バスケ部が部活中なのだろう。……それよりも……

「……未来。」

「何ですか?」

「もう少しつついてもいいんじゃないのか?」

未来は何故か、俺から30cmくらい離れた所に座っていた。

「いや、だって、私が近寄つたら色々面倒になるかな、と思いまして……。」

「面倒? ……どうこう意味だよ?」

軽く未来を睨む。

「いや、その……紅丞さん、今聴覚がパワーアップしてるんですよ

ね? ジヤあ私が近寄つたら、私の心臓の音が聞こえて、耳障りかな

ーと思いまして……。」

未来は申し訳無さそうに答えた。

「はあ……今更何言つてんだよ。」

「えつ……?」

「俺は、例え未来の心臓の音が絶えず聞こえるような環境に置かれても、その音さえも愛せるという自信があるぞ。」

「…………」

未来の顔が赤くなつた 可愛い奴だな。

「あ、ありがとうござります…………。」

未来は恥ずかしそうに、俺にくつろつくりに座り直した。

トクツ、トクツ…………直接聞いてるわけじゃないのに、未来の心臓の音が鮮明に聞こえる。…………もちろん俺自身の心臓の音も鮮明に聞こえる。

実は、脈拍が違う二つの音が、偶然重なる時があるのだが、俺はその音が好きなんだ。…………未来には内緒だけどな。

「ふふふ…………。」

つい、口元が緩んでしまつた。

「紅丞さん?…………今、笑いました?」

「いや、ちょうど、未来と俺の心臓の鼓動が、ほぼ同じくらいいのタイミングで重なつて……なんか面白くて……。」

そう言つた途端、未来の心臓の鼓動が速まつた。…………ああ、タイミングがズレしていく…………。

「おい、何照れてんだよ、タイミングがズレたじゃないか…………。」「うつ、うるさいです。気にしないでください…………。」

「そつは言つても、聞こえちまつしなあー…………。」

俺は嫌みっぽく答えた。

「…………やっぱり私、離れた方がいいですか?」

「いやいや、そんなこと言つてないから。」

「でも…………。」

その時

キイーン…………。

酷い耳鳴りが俺を襲つた。

「つ…………。」

思わず頭を抑える。

「紅丞さん?.....どうしたんですか?」

「いや、ちょっと耳鳴りが……。」

数秒後、ようやく耳鳴りが止んだ。

と、同時に、心臓の音が聞こえなくなつた。

「……聴覚が元に戻つたみたいだ。」

「そうですか。……それじゃあ、帰りましょうつか。」

未来は立ち上がつた。……俺も後に続いた。

帰り道

「未来、手、繋ぐか。」

急に、紅丞さんからそう言われた。

「……今はほかの生徒もいないみたいですし……良いですよ。」

私は、無防備だった紅丞さんの右手に自分の左手を 俗に言つ、

”カツプル繋ぎ”してやつた。

「え?」これって、カツプル繋ぎ?」

紅丞さんが予想以上に焦っている。

「何焦つてるんですか? 紅丞さんから誘つたんですよ?」

「いや、そうだけど……。」

紅丞さんは恥ずかしがつて俯いてしまった。……なんか可愛い。

「さあ、行きましょうか。」

私たちは家に向けて歩き出した。

「そういえば、紅丞さん。」

「何だ?」

「今、視覚がパワーアップしてるんですよね?」

「ああ……2キロ先の道路標識が見える。」

「視覚がパワーアップするって、視力が上がるだけなんですか?」

「いや、高速で動く物が見えたり、見えちゃいけない物が見えたりする。」

「見えちゃいけない物って、何ですか?」

「それは、アレだよ、その…………忘れてくれ。」

「嫌です、教えてください。」

「…………。」

「紅丞さん?」

「お、俺は悪くないぞ。視覚が勝手にパワーアップするから……。」

「言ひ訳なんて聞きたくないです。何が見えてるのか教えてください。」

「…………。」

次の瞬間、紅丞さんは私の手を振りほどき、走り出した。

「あつ……紅丞さん、逃げないでください……」

紅丞さんは、男のくせに体力がそんなに無い。……女とはいえ、中學時代は空手を習っていた私に適うはずがなかつた。

私は紅丞さんの腕を掴んだ。

「ほら、捕まえましたよ……！」

「！？……お前速すぎるんだよ……！」

「紅丞さんが遅いんです……わあ、もう逃げられませんよ……」

「頼む！許してくれ……！」

「許す許さないの問題ではなく、言ひ言わないの問題でしょ？……？」

「つ……じゃあ、言わない……！」

子供か、まつたく……でも、私もそろそろ気がつけかもしねれない。
「はあ……わかりました。」このひとは泣れます……。

「助かつた……あつ……。」

「どうしました？」

「視覚が元に戻った……。」

「てことは、今は普通の状態ってことですか？」

「……いや、触覚と味覚が一気にパワーアップした……。」

「触覚つて、ヤバいじゃないですか。」

「風が身体に当たつて痛い……。」

「大丈夫ですか？……早く帰りましょう。」

「だな……。」

紅丞さんは痛みに耐えながら、足早に帰宅した。

「痛つてえー……。」

紅丞さんは玄関に入るなり、私に寄りかかつて來た。

「だ、大丈夫ですか！？」

「平氣……ただ、足痛い…。」

「それ平氣じやないですよ！！しつかりしてください！！！」

玄関での騒ぎを聞きつけたのか、家の奥からグレイが走つて來た。

「未来ちゃん！紅丞！…どうかしたの！？」

「あつ、グレイ…紅丞さんが…。」

「紅丞、大丈夫？」

「全然…身体中痛すぎる…。」

何で私には”平氣”って言つておいて、グレイには”全然”なのだ
ら？…。

「とにかく、一度部屋に運ぶから、グレイ、手伝つて。」

「うん。」

部屋に入り、紅丞さんをベッドに寝かせた。

「痛つ…なあ、もう少し優しくしてくれないか？」

「男なんですから、耐えてくださいよ。」

「でも…痛い…。」

触覚がパワーアップすると、文字通り、触る感覚が鋭くなるので、
そよ風とか雨とかが痛く感じる…らしい。

以前、いたずらで耳に息をフーッとやった時にはキレられた。…紅
丞さん、キレイると意外に怖い。

「紅丞、まだ痛む？」

「うん……しばらくなつといてくれ……そのうち元に戻るから……。」「わかつた。」

「紅丞さん、何かあつたら遠慮せずに言つてくださいね？」

「ああ……ありがとう、未来。」

「……じゃあ、私たち、リビングにいるますから、元に戻つたら降りて来てくださいね。」「わかつた……。」「わかつた……。」

私とグレイは部屋を後にした。

「ねえ、グレイ。紅丞さんの事なんだけど……。」「紅丞が、どうかした？」

「あの”五感がパワーアップ”する力、どうにかならないかな？その……操れるようになる、とか。あのままじゃあまりにも紅丞さん可哀そうで……。」

「気持ちはわかるけど、さすがにそれは僕にもカラスにもビハーンもしないよ。紅丞が慣れるようにならないと……。」

「でも、触覚がパワーアップしたり、聴覚がパワーアップしたりすると、さすがに生活に支障がでてしまつし……。」

「うーん……一応、姉ちゃんと相談してみるよ。」「メルに?どうして?」

「姉ちゃんは吸血鬼よりの天使だし、もしかしたら、何か知ってるかもしぬないからね。」「

「ふーん……確かに、グレイとメルさんって、腹違いの姉妹……なんだつけ?」

「うん。姉ちゃんは僕のパパが僕のママに会つ前に会つた吸血鬼の間に生まれた子だからね。」「

今、物凄くわかりずらしい言い方された気がする。」「と、とにかく……メルに聞けば何かわかる?」

「あくまで可能性だけね。」

「わかつた。ありがとう。」

その時 携帯のバイブが鳴った。ディスプレイには知らない電話番号が載っていた。

「……誰だろ?」

出てみた。

「もしもしーし!」

「陸だつた。」

「陸!? あんた、私の電話番号知つてたっけ?」

「いや、あの後、日比野綾子って人を見つけて、聞きました。」「綾子…なんてことを…。」

「未来ちゃん、どちらさま?」

後ろからグレイが声をかける。

私は携帯のマイク部分を抑えながら

「私の従兄弟。…ちょっと待つてね。」

再び携帯を耳にあてる。

「で、陸、何の用?」

「ちょっと聞きたい」とがあつてな。…未来、彼氏いるって本當か?」

「え? あ、まあ一応……綾子から聞いたの?」

「うん。……驚いたよ、まさか未来に彼氏がなあー…未来つて、同性愛者だつたつけ?」

「違う。」

即答しといた。

「え? 違うの? てつきりそつかと…。」

「んなわけないでしょ、女の時の私の彼氏よ。」

「じゃあ、男の時はどうやって接してるんだ?」

「男の時は……女になるまで接してない。」

つていうか、男になつた時は速攻、暁文やグレイに血を分けて女にしてもらつてるから……なんて、陸に言えるわけない。

「てか……あれ？ 確か未来つて、怪我すると性別変わるんだよな？」

「いや、それ、違うみたいで……最近わかつたんだけど、大量出血すると性別が変わるらしいのよ。」

「てことは、いつも大量出血して性別を変えてる……ってことか？ 何のために？」

「何のために……。」

「考えてなかつた……。」

「未来？ もしもし？」

「あ、ごめん、その……何のために變えてるのかは、ちょっとと言えないとかな。」

「ふーん……まあいいや。んじゃ、そろそろ切るぜ。」

「うん、またね、陸。」

「おつづ。」

電話を切り、携帯をしまつ。

「未来ちゃん、従兄弟つて……未来ちゃんの性別の事知つてるの？」

「うん。」

「その人、学校の友達？」

「友達つて言うか……後輩、かな。会つのは5年ぶりなんだ。」

「5年ぶりつてことは、小学校以来、つてこと？」

「そういうことになるね。懐かしいなー……小学生の時はずっと一緒に遊んでたよ、家が近所だつたし。」

「へえ……。」

なぜかグレイがニヤニヤしながらじりじりを見ている。

「……グレイ、何か企んでる？」

「い、いやつ、別に？」

あ、田舎逸らした。

「グレイ？」

軽く睨む。

「いや、その……ただ、従兄弟だったなら、小さじこの、未来ちゃんがどういう子供だったのか知ってるのかなー?とか思つて……。」

「ああー……。」

小さじこの私が。そういうえば一度もそういう話をしたことが無かつた。

まあ、簡単に言つと、小さじこの私は、小学校、中学校と、9年間、立て続けにイジメにあつていた。

ことあるごとに暴力を受け、そのたびに性別を無理矢理変えられてしまう毎日だった気がする。

気がするつていうか……正直な話、辛すぎて無意識のうちに記憶から消去してしまった部分があるので、詳しくは覚えていない。

「……ま、そのうち話すよ。」

「うん。楽しみにしてるね。」

多分、話す事はないだろう。グレイには刺激が強すぎるかもしだれない。こういう約束は自然に忘れてもらつた方がいい。

「未来、帰つたのか?」

玄関の奥の方から暁文が歩いてきた。

「あ、うん、ただいま。」

「おかえり。……今、いいか?」

私は小さく頷き、暁文に近付く。

暁文は私を抱き寄せ、首筋の噛み痕にあわせるように歯を突き刺した。

「痛つ……暁文、グレイがいるんだから、もつ少し慎重にやつたほうがいいんじゃない?」

「ん……そうだな。」

暁文は私から離れ、肩を掴み、吸血した。

「……終わったぞ。」

暁文は俺から離れた。

俺はゆっくりとソファに座る。

「なあ、未来。」

「何?」

「出来れば、今度から背伸びしてくれないか?……歯が刺しづらいからさ。」

「解った。でも、それだったら、座つて吸血した方がよくなないか?」

「まあ、最初はそうだったけど……今は立つたままの方がやりやすいんだ。」

「ふーん……じゃあ、次からは背伸びすればいいんだな?」

「ああ、頼む。」

暁文はそう言いつと、リビングの隅にかけてられている「ヒートを着ると、リビングを出て行こうとした。

「暁文、どこ行くんだ?」

「ちょっと、アルトのところ。」

「グレイは、一緒にには行かないのか?」

「グレイは……どうする?」

暁文はグレイを見ながら質問した。

「他の吸血鬼のところには行きたくない……。」

「じゃ、未来と一緒にここにいてくれ。多分、夕方には帰ってくるから。」

「うん、気をつけてね。」

「ああ。」

暁文はリビングの扉を開けると、俺たちに背を向けたままひつ囁つた。

「……未来、グレイに変な事するなよ?..」

「したこと無いだろ!」

素早く反論すると、暁文は逃げるよひて家を出ていった。

「つたく……あの性悪吸血鬼……。」

無意識に、そう呟いた。

「未来ちゃん！ そういうの言ひや黙口だよーーー。」
ヤバ、聞かれてた。

「じ、ごめんなさい……。」

暁文とグレイは相思相愛の仲だから、互いの悪口を誰かが言つているのはとにかく許せないのだそうな。

謝つても、グレイの瞳は黒いままだった。
「悪かつたつて……機嫌直してくれよ。」

とりあえず撫でながら謝罪する。

グレイは、吸血鬼とはいえ、天使の血が混ざった吸血鬼。撫でられるのには弱いのか、たちまち瞳がピンク色になっていく。

「もつ……。」

最後には、機嫌を直してくれたようだ。
すると

ピンポン

家のチャイムが鳴った。とりあえずること。

「はーい。」

玄関に行き、扉を開けると、そこにいたのは

「よー！ 未来！」

陸だった。

従兄弟

「…………え？」

俺はつい、その場で硬直してしまった。

「おーい、未来ー？」

陸がわざとらしく俺の眼前で手を振る。

「えつ？ああつ……え？」

……なぜ、ここが解つたのだろう？俺と紅丞さんが同棲している事は綾子しか知らないはず あ、だからか？

「いや、”え？”はこっちの台詞だよ。いつ性別変わったんだ？さつき電話したときは女だったろ？」

そうだった。まずい、話題を変えねば……。

「えつと……綾子に聞いたのか？」

「え？何を？」

「ここを。」

「え？……ああ、うん。”従兄弟なら”って、特別に教えてもらつたんだ。”

綾子の奴……でも、陸なら良いか。

「陸、わかってるとは思うけど、このことは

「わかってるわかってる。これだろ？」

陸は自分の口の前に人差し指を立て、”静かに”のポーズをした。話が早くて助かる。

「……とはいって詳しい場所までは教えてもらつてなくてさ。その

辺歩いてる人に道聞いたやつたよ。」

陸は、少し照れながら答えた。 って、その辺歩いてる人？

「……なあ、陸。」

「ん？」

「その……今言つてた、歩いてる人つて、どういう人だつた？」
「えつと……かなり長身で、コート着てる、男の人だつた。」
「……暁文だ。

「そ、そつか……。」

「にしてもさ、その人、目が赤かつたんだよ。それに、天気良いのに、フード被つてたし……これじゃあまるで陸は、俺の目を見ながら、こう言つた。

「 吸血鬼。みたいだよな？」

瞬間、俺は、脳内の隅から隅まで凍り付くような感覚に襲われた。

「……つて、未来？顔真っ青だけど、大丈夫か？」

「えつ？……ああつ、大丈夫、大丈夫……。」

嘘だ。ちつとも大丈夫じゃない。

「な、なあ、陸。どうして、その人が吸血鬼だつて思つたんだ？」

「いや、俺が今読んでるネット小説に出てくる吸血鬼の特徴と似てたからさ。長い八重歯もそうだし。」

「なあんだ。そう言つことか……。」

「未来ちゃん、どちらさまだつたの一？」

ふと、リビングからグレイが歩いてきた。

「あつ。」

そして、陸の姿をとらえた。……どうやらもつ帰つたと思つて出て

きたらしい。

「うわー、未来、あいつ誰! あやめ可憐ことやん!」

「え、あ、いや、その……。」

陸の言葉に、グレイが頬を赤く染めた。

それや、かういふことを愛にから
「こゝはおのれのナニヤ。」

し 知り合はるか。……か。……と得て、
俺は慌ててブノイギリゾウの奥へ入った。

やばくない？

が海外の子なんだから

か。おまかせ話願仕

「ああ、井口が、毒。」

「めでたしかなー。」

陸は元気に返事を返し、家を出ていった。

どうしても、解らないことが一つだけある。

俺が、未来の住んでいる家に行く道中に遭つた、あの吸血鬼。そして、未来と話している最中に現れた、あのめちゃめちゃ可愛い吸血鬼。

未来はどういちの吸血鬼のパートナーなんだ？

同じパートナーをやつている身でこんなことを言うのはちょっと酷だが、未来には、吸血鬼のパートナーは合わないとと思う。

……だって、出血で性別が変わるんだぜ？さつきだって、電話した後に会つたらもう男になつてたし……っていうか、その事聞いたら無理矢理話題逸らされたし……

恐らく、電話のすぐ後に血を引いたんだろう。

……不安だ。自分の従姉妹が吸血鬼のパートナーをしている……これほど不安なことはない。

未来と俺は、共に一人っ子。だから、小さい頃は、本当の姉弟のように接していた。もはやそこには、従姉妹なんて壁はなかつた気がする。

だから、不安なのだ。自分の姉の安否が、無性に心配になつてしまふのだ。

……でも、本人は至つて楽しそうだし……それならそれで、良いのかな？

不安を抱えつつ、俺は自分の家の扉を開ける。

”ただいま。”を言う前に、俺は何かに抱きつかれた。

「おかえりっ、陸。」

声の主に、耳元で歓迎される。

「ああ、ただいま。
 メル。」

俺は、それなりに呆れた声で答えた。

セーフ？

危なかつた……。

暁文の事について訊かれるわ、グレイの姿は見られるわ、男になつたことを問われるわ……災難だつた。

「はあ……。」

俺は意氣消沈のまま、グレイのいるリビングへと戻つた。
「未来ちゃん……」「めんね。もう帰つたのかと思って……。」

グレイは相当後悔しているようだつた。瞳が青い。

「いや、平気……あいつが、さつき電話で話した従兄弟だよ。」

「ふーん……なんか、大人しそうな人だつたね。」

「そつか？ちびだし、結構やんちゃだぞ？」

昔の話だが、多分今もそつだろ。

「駄目だよ、従兄弟をちびつて言ひちゃあ。……僕も結構気にして
るんだし。」

「ああ、そうだつたな……」「めん。」

その時

「未来。」

俺の名前を呼びながら、紅丞さんが2階から降りてきた。

「……って、なんだ。男になつてたのか……。」

なぜか、俺の顔を見て、少し残念そうな顔をした。

「別にいいじゃないですか……。」

「まあそうだけど

「紅丞、僕、お腹空いちゃつたよ。」

何か言おうとしていた紅丞さんを止めるように、グレイが血を催促する。

「ああ、解つた。」

紅丞さんはグレイに近付き、その場にしゃがむ
グレイは紅丞さんに抱き着くようにしがみ付き、吸血を始めた。

「うーん、なんかちょっとジホラシー。……って、何言つてんだ俺。

「…………ありがとう、紅丞。」

「ああ。」

グレイは紅丞さんから離れると、足早に部屋へと戻ってしまった。

「よいしょっ。」

紅丞さんはフランフランしつつ、立ちあがった。

「紅丞さん、大丈夫ですか？」

「ああ、平気。俺、ちょっと部屋で休んでくるわ。」

そう言つと、ゆっくりと階段を上つて部屋へと行つてしまつた。

。

「…………はあ、暇だな……。」

玄関で一人。……じつじつ時は

そりだ、買い物に行こう。

俺は財布と携帯、家の鍵を持ち、マートを着て家を出た。

アルト

「暖かいなあ……。」

周りに誰もいなく、1人なのをいいことに、未来は独り言を呴きながら桜公園の横の道を歩いていた。手には、コンビニの袋をぶら下げている。

……つていうか、いくら暖かいとはいえ、後ろを歩いている俺に気付いてもいいのではないだろうか？

「未来！」

仕方なく後ろから声をかける。

「つ！？」

未来は物凄く驚いた顔で振り向いた。

「あ……アルトじゃないか！：久しぶりだな、こんなところで何やつてんだ？」

未来は驚きを隠しつつ話しかける。

「……お前、”誰もいない”と思つて独り言を言つたけど、それを俺に聞かれて恥ずかしいから”ちょっと誤魔化そうとしてないか？”

「え、あ、いや、あの……みんなには、内緒にしてくれないか？」

「言われなくてもそうするつもりだ。……つたく、無防備だなお前も。夏子とは大違ひだ。」

「夏子つて……誰だ？」

「ん？……ああ、言つてなかつたか。夏子は俺のパートナーだ、歳は大体お前と同じくらいだな。」

人見知りで人間不信：簡単に言つと、たいして命を狙われてもいいのに、無駄に自分を防衛したがるタイプ……つて感じだな。」

「へえ……でも、確かアルトも、人間嫌いじゃなかつたつけ？」

「ああ、もう慣れた。」

「え、そつなのか？」

「……じゃなかつたら俺は未来に話しかけてないぞ？」

「それもそつか……ところで、アルト。」

「何だ？」

「暁文はどうしたんだ？ わりと、アルトのところへ行って出てつたはずだけだ。」

「ああ、アカツキさんなら、確かにさつき、俺のところに来たよ。軽く世間話した後、すぐメールのところに行つちまつたけどな。」「メールの所に？ そういうえば、メールつてパートナーいるのかな？」

「いるらしいぞ？ だいたい未来よりも2歳年下らしい。」

「ふーん……。」

「……まあ、未来、ちょっと頼んでもいいか？」「なんだよ？」

「俺、今腹減つてんだけど、お前の血、少しでいいから分けてくれないか？」

瞬間、未来はかなり驚いた顔をしていた。

「……は？ 今、なんて？」

「いや、だから、腹減つたから、血、分けてほしいんだけど。」

「ひ……いやいやいや！ 無理に決まってんだろう！ ふざけんな！！」「はあ？ なんでだよ。俺はもう向吸血鬼界こうの世界での権利はとっくに剥奪されてるから多重契約してもいいはずだが？」

「そういう問題じゃねえよ！！ 血が欲しいんならパートナーからも

らえればいいだろー？」「

その言葉に、俺は呆れてため息をついた。

「はああ……解つてねえな、お前も。」

「え……？」

「俺がお前の血を欲しがつてることは、要するに、”性別人間の性別が変わるところが見たい”ってことだろ。解んねえのか？」

「え、いやつ……確かに、俺は吸血鬼界では結構有名みたいだけど、なんでそんな……。」

未来は困惑の表情を浮かべている。どうすればいいのか解らないようだ。

「なあ、いいだろ？ 未来。ちょっとだけ。」

「……。」

未来は戸惑いながら辺りを見渡し

「……ちょっとだけなら。」

了承は得た。

俺は未来に近付き、肩を掴み、口を前に近付け、歯を刺した。

「つ……。」

歯を刺した瞬間、未来の身体が痙攣した。

「……安心しろ、すぐ終わるから。」

「……暁文はいつもそういつて、物凄い速さで吸血していくんだけどな……。」

「だから、安心しろって。俺はそんなことしないから。」

「ほ、本当か？」

「……嘘ついて何の意味があるんだよ。」

呆れながら、血が溢れる噛み痕に吸いついた。

甘い。

吸血鬼の血を飲んだ人間の血は甘いという話だが、未来の場合は人の吸血鬼の血を飲んだから、正直言つとめちゃめちゃ甘い。

何度か吸つてはいるが、未来の身体に変化が現れた。

身体が女性化していく。

身長は変わらないまま、体格や髪型、髪の色さえも変化していく。

「あ……アルト……もう、離して……。」

女声で頼まれた。仕方なく離す。

未来から離れ、改めてその姿を見る。

男の時の未来は、髪はショートヘアで黒色、肌も普通で、少し童顔っぽい顔だつた気がする。

それに比べて、女の時は、肌の色は変わらなくとも、髪はセミロングまで伸び、栗のような茶色に染まっていた。顔も少し大人っぽい。

「へえ……流石性別人間。男と女じゃ見た目が違うな。」

「…………そりゃあ、性別が変わるんだから、見た目もそのままじゃいけないでしょ……。」

未来は呆ながら呟いた。

「?…………その様子だと、口調も変わってるみたいだな。」

「うん。男と女で口調が変わるみたい。性格は同じだけど。…………つていうか、私、向こうの世界で噂になつてるんだよね?そこら辺は解らなかつたの?」

「ああ、お前はただ”性別が変わる人間”としか言われてないから、詳しいところでは解らないんだ。」

「ふーん…………じゃあ、私、そろそろ行くね?」

「おう、今日はありがとな。」

「うん。それじゃ、また。」

未来は踵を返し、再び歩いて行つた。

噂の性別人間、やはり凄い奴だった。

性別が変わると、いうのも凄い話だが、本人はそのことに一切”嫌”という表情をしていなかつた。

……確かに、吸血鬼界では、未来は”性別が変わる人間”ということと、”正義感が強い”という情報が1番多く広まつてはいるが、それ以外に、”完璧な人間だ”とも言われている。

初め、俺はその意味がよくわからなかつたが、未来に会つて、初めてその意味が分かつた。

性別が変わる事を、受け入れている。

……完璧だな、確かに。

アカツキさんは大丈夫だろうか？

だつて、アカツキさんは完璧というよりむしろ

……やめよう。こんな話はするべきではない。

「……ただいま。」

家にたどり着き、扉を開けて中に入る。

「おかげり、アルト。」

中から、俺のパートナー

夏子が迎え入れてくれた。

夏子も、正直言うと普通の人間ではないのだが……

その話は、また今度でいいか。

冤罪

「ただいま。」

玄関の扉を開けて中に入った。

「あつ、未来ちゃん、探したよ?」

グレイがリビングから飛び出してきた。

「え、私を?……ああ、出かけるつて伝えてなかつた……」「みんなさいい。」

「別にいいけど……どう行って來たの? コンビニ?」

「うん。少し買い物に出しひにね。あ、その途中でアルトに会つたよ。」

そう言つた瞬間、グレイの瞳の色が青色になつた。

「え…アルトに?」

「そう、だけど……。」

言わない方がよかつたかな?

「もしかして、血、吸われなかつた?」

「え?…ああ、実はそなんだよね…。」

確かに、さつき男で、今は女…そりやあ吸血されたことを疑つわけだ。

「そつか…アルトに会つたんだ…。」

グレイの表情は落ち込む一方だつた。

…多分、これ以上踏み込んではいけないのだろう。

曉文が入つて來た。

その瞬間、ガチャツと扉が開き

「よつ。」

曉文が入つて來た。

「アカツキー。」

グレイが笑顔で曉文に近付く。

暁文はグレイの頭を撫でながら

「おう、グレイ。未来に何かされなかつたか？」

……だから何もしてないつーの……！

不安

その日の夜、部屋でのんびりしていると、紅丞さんが入ってきた。

「未来、ちょっとといいか?」

「なんですか?」

「今日学校で見たあの手紙の事なんだが……。」

「手紙って、あの悪戯の事ですか?」

「実は、あの手紙、悪戯じゃないかも知れないんだ。」

「え?……どういう事ですか?」

とりあえず紅丞さんを部屋に招き、詳しく話を聞くことに。

「……俺、あの手紙を見たときさ、視覚がパワーアップしてたんだよ。」

「確かに、そうでしたね……。」

「その時にわかつたんだけど……あの手紙の字、人の血で書かれてたんだ。」

「えつ!? 人の血、ですか?」

紅丞さんは小さく頷いた。

「……ますます不気味ですね……。」

「ああ。……あの後、何かおかしなことはなかつたか?」

「いえ、特にありませんでした。」

「そうか……もしも、何かあつたら、すぐに俺に言えよ?」

「はい、解りました。」

「……それじゃ。」

そう言つと、紅丞さんは部屋を出て行つてしまつた。

……人間の血……か。

以前、中学の時にイジメを受けていたときは、出血した私の血で教

科書類に悪戯書きされたことはあつたけどなー……他人の血は初めてだ。

人間の血を簡単に入手することができるのは、吸血鬼ぐらいいしかいないだろ?。

手紙を入れた本人が自分の血を使って描いた可能性も無くはないが、それだったら赤いペンキを使ってもいいだろ?。わざわざ自分の血を使って危険を被る必要がどこにある?

紅丞さんは”何かあつたら、すぐ俺に言え”と言つていたが……。軽々と言つて、危険な事に巻き込んでしまつたらと思うと身の毛が立つ。何かあっても絶対言わない。

「はあー……。」

深くため息をつき、ベッドに腰を下ろす。

……中学の時にイジメを受けていた事を少しだけ思い出した。
些細な事で大きがをして大量出血……大体そこから歯車が狂つたんだよなー……。

ことあることに体育館裏とかに呼び出され、断れば「性別の事を周りに広める。」と脅され、行つたら行つたで暴力受け……

先生に相談しようにも向こうも私から遠ざかり……とにかく居場所が無かつた。

まあ、小学校も似たような感じだつたし、中学で大量出血したときは「ああ、また同じ事されるんだなー。」という印象しかなかつた。

怖くなんかない。イジメはもう慣れた。怖いなんて思つてないはず。

「……寝よっかな。」

考えても仕方がない。何かあつたらあつたで、私には強運があるから Bieber にかなるはずだ。2回も誘拐された経験上そう言える。

私はベッドに潜り、少々早い時間に眠りについた。

不安（後書き）

紅白なう 今年もあと2時間弱！！盛り上がりましてまいりました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9628z/>

性別人間と幽霊人間

2011年12月31日22時47分発行